

後期・邪馬台国の時代③

～英彦山と宗像～

河村哲夫

『彦山流記』

『彦山流記』(高千穂家所蔵文書)という書物がある。建保元年(1213)癸酉七月八日の奥書があることから、鎌倉時代に書かれた書物であることがわかる。

邪馬台国の時代からみれば、はるか後代の書物で、しかも英彦山修験道の影響を色濃く受けた内容となっていることから、古代史の史料として用いるためには、一つ一つの記事内容を注意深く精査し、慎重に取り扱うべきことはいうまでもない。

もちろん、「本地垂迹説」に基づいて記述されている。天竺(インド)の神々が姿を変えて日本の神々になったとする——いわゆる神仏同体の説である。日本での神名を「垂迹」あるいは「権現」といい、天竺の仏名を「本地」という。日本固有の伝統的神道と外来仏教との融和を図ろうとする趣旨であることはいうまでもない。

垂迹神と本地仏との例示的な関係は次のとおり。

垂迹神(権現)	本地仏
天照大神	大日如来
月読命	阿弥陀如来
素盞鳴	牛頭天王・薬師如来
伊弉諾尊(イザナギ)	釈迦如来・阿弥陀如来
伊弉美尊(イザナミ)	千手観音菩薩
大行権現【高皇産霊尊(タカミムスビ)あるいは猿田彦】	毘沙門天
市杵島比売命	弁財天
山幸彦	文殊菩薩
瓊瓊杵尊	釈迦如来
大国主神	大黒天
天之忍穗耳命	弥勒菩薩

『彦山流記』における英彦山の垂迹神と本地仏

英彦山		垂迹神(権現)	本地仏	備考
北岳	法体岳	忍骨尊 (天忍穗耳命)	阿弥陀如来	もと大国主命・宗像三女神が祭られていたという。
南岳	俗体岳	伊邪那岐尊 (イザナギ)	釈迦如来	
中岳	女体岳	伊邪那美尊 (イザナミ)	千手観音菩薩	

『彦山流記』は、以下のような書き出しではじまる。

ただし、本来の書き出しではないようである。広瀬正利氏は、「前半が故意に失われている。恐らく、明治維新の廃仏毀釈、修験道廃止の際における心なき人の所為であろう」とされる(『彦山流記一解説にかえて一』)。

彦山権現垂迹縁起拔書

夫権現昔者、抛二月氏之中國、渡日域之邊裔、給初、遙志東土利生、知垂迹和光砌。自摩訶提國、投遣五劍、之後、甲寅歲震旦國天臺山王子晋之舊跡、東漸。御意深、凌西天之滄波、交東土之雲霞、其乘船舫、親在豊前國田河郡大津邑、今號御舟是也。著岸之当初、香春明神借宿。地主明神稱狹少之由、不奉借宿。爰権現發攀縁、勅壹萬十萬金剛童子、彼香春嶽樹木、令曳取。因茲枝條蔽葭磐石露形。即時権現攀登彦山之日。地主神北山三御前我住所、権現奉讓之間、暫當山中層推下居、終移許斐山給。金光七年丙申歲、敏達天皇御宇也。
(五七六)ひのえ

其垂迹之始、先八角水精石、躰三尺六寸形。般若窟上天降給所投遣之第一劍、此窟上見付給時、四十九箇窟各御正躰分、権現并守護天童奉安置之、即一十萬金剛童子是也。

「そもそも彦山権現の昔は、月氏国(クシャーナ国)の王子が中国から日本の僻地のこの地にお渡りになったのが初めであります。遙かに遠い東の国、日本の衆生を救いたいと願われ、垂迹の場所を知るために、摩訶提国(マガダ国)から五口の剣を投げられて後、甲寅の歳、震旦国(中国)の天台山(浙江省)の晋の旧跡から東に進まれました。そのお心は深く、西方の大海原を越え、東方の雲や霞のかかっている陸地に沿って進み、その船の着いた所は、豊前国田川郡大津村でした。今は御船という所です。

長い船旅の末ようやく岸边に着いて上陸された時、香春明神に宿を借りたいと申し入れましたが、香春明神は狭小であることを申し立てて宿を貸そうとしませんでした。そこで権現は大いに立腹され、大勢の金剛童子にお命じになって香春岳の樹木を引き抜かせてしまいました。そのために今まで生い茂った草木のために覆い隠されていた磐石がすっかり露出してしまいました。

それから権現は直ちに彦山によじ登られたところ、前々から居住していた地主神の御三方は、快く権現に山を譲られて、しばらくは山の中腹に留まっていたましたが、その後筑前国の許斐(このみ)山に移られました。この年は金光七年丙申の歳、敏達天皇の御代(敏達五年・576)のことでありました。

その垂迹の初めは、八角の水晶石で、その長さは三尺六寸でありました。般若窟(はんにゃくつ)の上に天降っていた第一剣を見つけられ、それから彦山の四十九窟に御正体を分かち、権現と守護天童を安置し奉りました。この守護天童がすなわち一万十万(大勢)の金剛童子であります」

超能力と超自然現象のオンパレードで頭がクラクラしそうであるが、古代史のヒントになり得ると思われる箇所をピックアップすれば、次のようなことになろうか。

(一)「船の着いた所は豊前国田川郡大津村で御船という場所」

田川郡は、豊前国で唯一海岸線を持たない郡である。まったく外海に面していない。

しかしながら、英彦山を源流とする彦山川は、北へ流れて、直方で遠賀川となり、響灘とつながっている。逆にいえば、響灘から遠賀川・彦山川へと船で上ることができる。

海に面してはいなくても、田川郡には船が停泊できる大きな津(港)があったのではないか。

それが『彦山流記』に反映されたのではないか。

田川郡内の村名や大字・小字名などから、「豊前国田川郡大津村の御船」という地名を見つけることはできないが、強いていえば、田川郡福智町の市場あたりか。

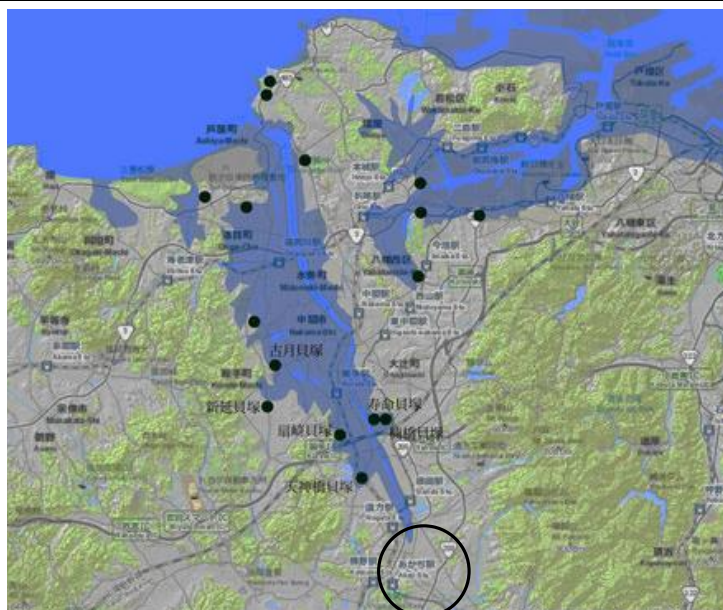
市場は市津(いち)と草場(くさば)という村が合併してできた地名で、彦山川と遠賀川の合流地点に近く、古い時代には直方あたりまで響灘が湾入していたとされるから、海にも近い場所である。

市津(いち)——商売盛んな港、という地名は、大津にも通じる。

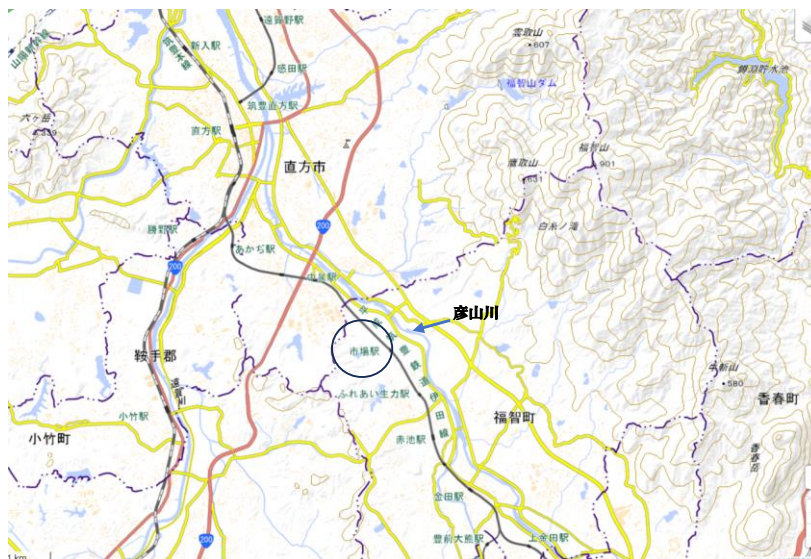


田川郡の大字・小字の状況

市町村	旧町村	大字	字
福智町	赤池町	赤池	暁町、旭町、上寿、北町、貴船、小藤、猿畑、下寿、下桜町、車道、昭和町、新町、十区、徳人原、中町、長浦、西寿、西町、花園、伏原、松本町、南町
		上野	板取、今屋、大浦、大久保、大谷、上小路、北田、小路、皿山、下小路、鋤木田、諏訪山、常福、原、原田、堀田、薬王寺
		市場	石松、市津、草場、入分、春日、上河原、猿田、宗ノ辻、竹ヶ鼻、松本、吉ヶ浦
	方城町	伊方	犬星、後谷、新門、大正町、鶴ヶ丘、中原、中古門、長浦、西古門、野添、東区、東長浦、東古門、平塚、広谷、前村、丸山、見六、矢久保、八幡町、山ノ手
		弁城	岩屋、上弁城、久六、草場、迫、新町、浄万寺、野地、野地原、春田、宝珠
	金田町	金田	岩淵、浦ノ谷、上金田、北ヶ迫、黒尾、境町、敷島、新町、高畑、宝見、西金田、東金田、人見、本町
神崎		飯土井、笹尾、下神崎、高尾、半蔵、人見坂、福丸、福吉、崖ノ下、南木、若草	
香春町	勾金村	柿下	柿下
		鏡山	岩原、大君原、鏡山、上岩原、呉
		香春	魚町、五徳、新町、三角、殿町、中組、長畑、ハコ町、本町、前川原、前村、山下
		高野	上高野、下高野一区、字下高野二区
	中津原	一本松、浦松、上清団地、紫竹原、高松団地、鎮西町、中津原、東紫竹原団地、不動、平成区、豊産、三井、南紫竹原、宮尾一区、宮尾二区、宮尾三区	
採銅所村	採銅所	採銅所一、採銅所二、採銅所三、採銅所四、採銅所五、採銅所六、採銅所七、採銅所八、採銅所九	
糸田町	糸田村、鼠が池村、大熊村、弓削田村の宮床	旭ヶ丘、打越、大熊、上糸田、北区一、北区二、貴船、西部、下糸田、真岡神社町、真岡西町、真岡東町、自由ヶ丘、谷川、中糸田、鼠ヶ池、原、日吉町、福丸、堀川団地、水落谷、南糸田、宮川一、宮川二、宮床、宮床団地、宮山、桃山	
田川市	後藤寺町	弓削田村、奈良村、川宮村	
	伊田町	伊田村、伊加利村、金川村(夏吉・糺)	
	猪位金村	猪国、位登	
赤村	赤村	上赤村、下赤村、山浦村	
	内田村	大内田村、小内田村	
大任町	大任村	大行事村(福田村、元松村、白土村、安永村、成光村、秋永村、柿原村) 今任原村(上今任村、下今任村、桑原村)	
川崎町	川崎村	川崎村(東川崎村、西川崎村、田原村、池尻村) 安真木村(安宅村、黒木村、木成村、荒平村、上真崎村、下真崎村)	
添田町	添田村【添伊田村(添田町村、添田村、伊原村)、庄村、野田村】、中元寺村、彦山村、津野村		



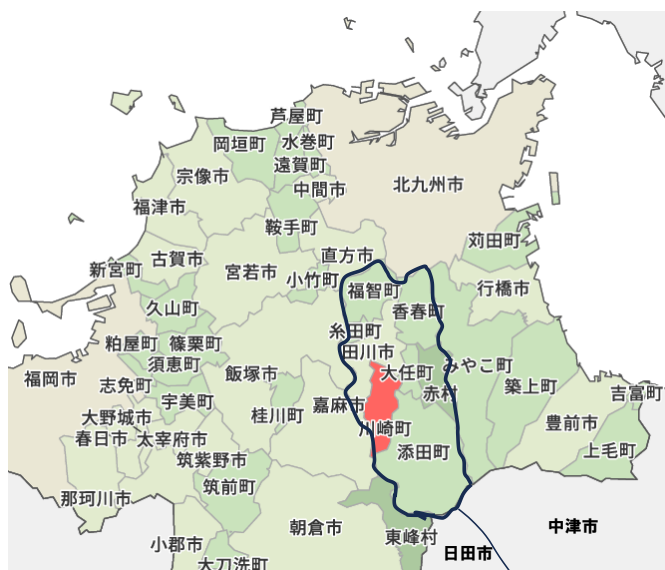
市場の位置

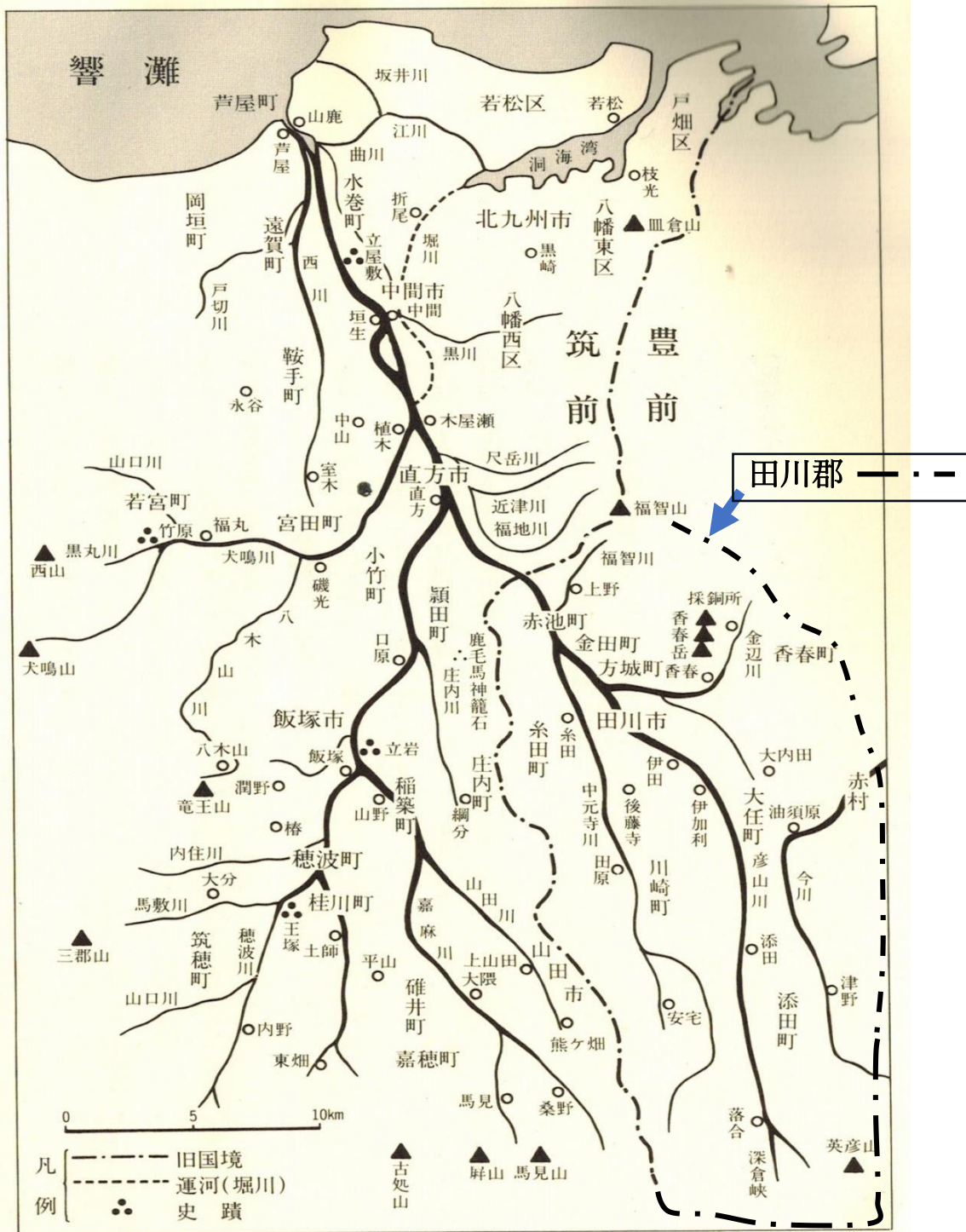


彦山川の域内貫流状況

市町村	彦山川の状況	貫流
福智町	彦山川・中元寺川の2本の河川が貫いており、両河川は町の中央で合流	○
香春町	金辺川に呉川・御祓川が注ぎ込んで西へ流れ、隣の田川で彦山川と合流	×
糸田町	中元寺川が南北に貫流	×
田川市	彦山川に中元寺川・金辺川が合流して北流	○
赤村	今川が赤村の中心部で北東に流れを変え、行橋市から周防灘へ	×
大任町	彦山川が町の中央部を南北に貫流	○
川崎町	中元寺川の上流	×
添田町	英彦山を源流に添田町を貫流して北へ流れる。直方で遠賀川と合流	○

田川郡の領域





(二)「香春明神に宿を借りたいと申し入れたが断られた。権現は立腹し、大勢の金剛童子に命じて香春岳の樹木を引き抜かせた。そのため覆い隠されていた磐石がすべて露出した」
 香春岳は、全山石灰岩の山である。樹木を伐採すれば、石灰岩が露出する。——『彦山流記』
 の筆者あるいは選者は、そのことをよく知っている。

ついでながら述べると、戦後の高度成長期において、日本セメント(株)など日本有数の大企業が

香春岳の石灰岩を採掘した。

一ノ岳は半分程度の高さに削られ、現在では二ノ岳でも石灰岩の採掘が始まっている。

三ノ岳には小規模のスカルン鉱床(skarn deposit)が数多く存在している。スカルン鉱床とは、石灰岩がマグマと接触して生じた銅・鉄・鉛・亜鉛・タングステン・金・銀などの鉱床のことである。

香春岳の三ノ岳で採掘された銅鉱石が、奈良の大仏の築造に多大な貢献をしたことはよく知られている。採銅所という地名は、その名残である。

採銅所では、銅のみならず鉄鉱石も採掘されていたらしく、宮原金山遺跡からは平安時代中期から鎌倉時代にかけての製鉄遺跡——鉄鉱石を原料とする製鉄炉 3 基(竪型炉)および鍛冶遺跡が見つかった。遺跡内からは、総重量 10 トンを超える鉄滓や炉壁なども出土し、製鉄から鍛冶に至る一連の行程が行われていたことが確認された。あまり知られていないが、日本の製鉄史上の一大発見である。

なお、日田彦山線の採銅所駅の東南の丘陵地に「古宮(こみや)八幡宮」がある。祭神は豊比咩命・神功皇后・応神天皇である。

東南約 2 キロの三ノ岳には、豊比咩命を祭る豊比咩命神社があったが、和銅二年(709)に一ノ岳山麓の香春神社に合祀されたことについてはすでに述べたとおりである。

もちろん、豊玉姫ではなく、万幡豊秋津師比売命とみられることについても、前述のとおりである。



(三)「地主三神(宗像三女神)は、快く権現に山を譲られ、その後筑前国の許斐(このみ)山に移った。この年は金光七年丙申の歳、敏達天皇の御代(敏達五年・576)のことであった」

『彦山縁起』によると、日子山(英彦山)において宗像三女神のうち田心姫と湍津姫を妃とした大己貴命(大国主命)は、北岳に鎮座し、市杵嶋姫は一人中腹に鎮座したという。

そこにイザナミ(伊弉冉尊)・速玉男命・事解男命の三尊(みこと)が三羽の鷹になって東より飛来し、生きた鷹の姿そのままに岩に姿を変えた。驚いた大己貴命(大国主命)は日子山(英彦山)を三尊に譲り、三女神は宗像社、大己貴命は許斐山に遷座したという。

『彦山縁起』は「今筑の宗像に金魚山の東に許斐権現の社あり」と記すが、宗像市と福岡町の境界の許斐山(271メートル)にある熊野神社(宗像市王丸)のこととみられている。

『日本書紀』によれば、宗像三女神は宇佐から宗像に移動している。

『彦山流記』と『彦山縁起』は、【宇佐→英彦山→許斐(このみ)山→宗像】という『日本書紀』にはない経路を記している。

このように、仏教的修飾を取り除けば、宗像三女神・大己貴命(大国主命)の許斐山への移動という貴重な情報が入手できるわけである。

宗像三女神の移動経路の詳細については、先の方で詳しく述べたい。

(四)そして、『彦山流記』は英彦山の「四至(四方の境界)」——支配領域の範囲を記す。

表にまとめれば、次のとおりとなる。

英彦山の四至(四方の境界)

四 境	『彦山流記』	下 図	備 考
東の境	豊前国上毛郡雲山國中津河大井手口	山国雲	雲八幡神社
南の境	豊後国日田郡屋形河壁野 豊後国日田郡屋崇 豊後国日田郡大肥の里	壁野(三和村) (?) 大肥(大肥村)	49 窟・壁野窟
西の境	筑前国上座郡内把岐山 筑前国上座郡西島郷 筑前国下座郡内円幸浦尻懸石 筑前国嘉麻郡八王子の道祖伸	杷木 (石成村?) 小石原江川 八王子	
北の境	豊前国田川郡岩石寺 豊前国田川郡法体岳	岩石 蔵持	

七里結界に配置された四十八の大神事社

大神事権現を祭る神社——大神事社というものがある。

行事という単語は、恒例行事などとして現代でも日常的に用いられているが、もともとは仏教用語に由来する。『広辞苑』にも、

「大神事(だいぎょうじ) ①大法会の際に万般の指揮をとる僧。また寺内の事を執行する役。

②大神事権現の略称。山王二十一社の一」

と記されている。

『福岡県百科事典』(西日本新聞社)には、さらに詳しく次のように記されている。

大行事社 だいぎょうじしゃ 京都府、滋賀県境の比叡山に^{まつ}祀る山王二十一社のうち、中七社に「第四大行事宮」とあって本地は^{びしや}毘沙門天、習合的呼称を大行事権現と呼ぶ。1172年（承安2）正三位に叙位。大行事はもともと寺院における法会の際に準備、法式儀則など万般の指揮をとる僧のことをいう仏語で、大行事神にも当初から仏教擁護の善神という意味があったと思われるが、山王^{いちじつ}一実神道では、より具体的に、大行事権現を猿田彦神あるいは高皇産靈^{たかみむすびのみこと}尊に習合させて山王権現の惣後見といい、山王権現勧請の場所には必ずこの神を奉斎すると説いている（『叡神鈔』）。県内では彦山がその神領内に48カ所の大行事社を置いたというのが顕著な事例であるが、そうした神社形態をとらぬもので、太宰府市、筑紫野市などを中心に大行事と刻まれた石塔が散在しており、作神あるいは牛馬神、疫神などの信仰を継続しているのがみられる。いずれも天台系寺社による山王信仰宣布の一翼を担っていたものと思われる。→彦山大行事社
→高木神社 <佐々木哲哉>

要点をまとめると、次のとおりとなる。

①	垂迹神(権現)は大行事権現【英彦山では高皇産靈尊(タカミムスビ)】 本地仏は毘沙門天
②	大行事はもともと寺院における法会の際に、準備、法式儀則など万般の指揮をとる僧のことをいう仏教用語
③	山王権現勧請の場所には必ず大行事権現を祭る。
④	英彦山の神領内に48の大行事社を置いた。

七里四方の結界

英彦山の伝承では、弘仁2年(811)に法蓮の弟子の羅運によって、英彦山を中心として七里四方に結界が張りめぐらされ、大行事社が設けられたという。

山内大行事社五か所・六峰内大行事社六か所・山麓大行事社(七大行事社)七か所・各村大行事社二十二か所の計四十社である。

のちには、各村大行事社が八社増えて三十社となり、総計も四十八社に拡大した。

☞ 点合護法神社又六大大行事神社は彦山四土結界地
五ヶ所内の限界において不浄不正を忌む

☞ 六峰大行事社

☞ 山麓七大大行事社

○ 各村大行事社二十二ヶ所

計 40 社

大行事社の種別および社数

種 別	設置地域	神社数		備 考
		当初	後	
山内大行事社	英彦山内の大行事社 (四土結界地内)	5 社	5 社	南坂本・西谷・下谷・玉屋谷 北坂本
六峰内大行事社	福智山・等覚山・蔵持山・ 求菩提山・松尾山・檜原山	6 社	6 社	田川郡・福智山 京都郡・等覚山(普智山) 京都郡・蔵持山 上毛郡・求菩提山 上毛郡・松尾山 下毛郡・檜原山
山麓大行事社 (七大大行事社)	七里四方の神域	7 社	7 社	豊前国田川郡添田村 豊前国下毛郡山国郷守実村 豊後国日田郡夜開郷林村 豊後国日田郡鶴河内村 筑前国上座郡黒川村 筑前国上座郡小石原村 筑前国上座郡須川村
各村大行事社	七里四方の神域内の村々	22 社	30 社	
		計 40 社	計 48 社	

七里四方といえば、半径 28 キロ四方という広大な領域である。

周知のとおり、英彦山は出羽三山(山形県)・熊野三山(和歌山県)とともに「日本三大修験山」に数えられた山である。

最盛期には数千名の僧兵を擁し、戦国大名に匹敵する兵力を保持していたといわれる。

『中右記』(1094)には、彦山の山伏集団による大宰府強訴事件が発生し、その勢いに恐れをなした大宰大貳の藤原長房が京に逃げ帰った逸話が記されている。

最盛期には、「三千の衆徒、八百の坊」があったといわれる。

山伏たちが山中の岩窟に籠って行う修行を「峰入り」という。

『彦山流記』によると、山伏たちが籠る英彦山内外の岩窟は 49 窟もあったという。



玉屋窟
(もと般若窟)

49窟

1	玉屋窟	11	鷹窟	21	伝供窟	31	大河辺窟	41	牛窟
2	蔵持山窟	12	千仏窟	22	鉸戸窟	32	大星窟	42	鷺窟
3	宝珠山窟	13	鷹尾窟	23	焼尾窟	33	小四王窟	43	経窟
4	大南窟	14	机窟	24	虚空窟	34	文殊窟	44	門窟
5	五窟	15	廻雲窟	25	二戸窟	35	空鉢窟	45	龍窟
6	鷹栖窟	16	飛雲窟	26	久穂窟	36	俱利迦羅窟	46	法花窟
7	智室窟	17	小玉屋窟	27	不動窟	37	二鷹栖窟	47	劍窟
8	今熊野窟	18	豊前窟	28	千手窟	38	三鷹栖窟	48	末佐木窟
9	天上窟	19	花崗窟	29	龍口窟	39	琥珀窟	49	壁野窟
10	求菩提山	20	深蔵窟	30	豊後窟	40	火尾窟		

修験者の道

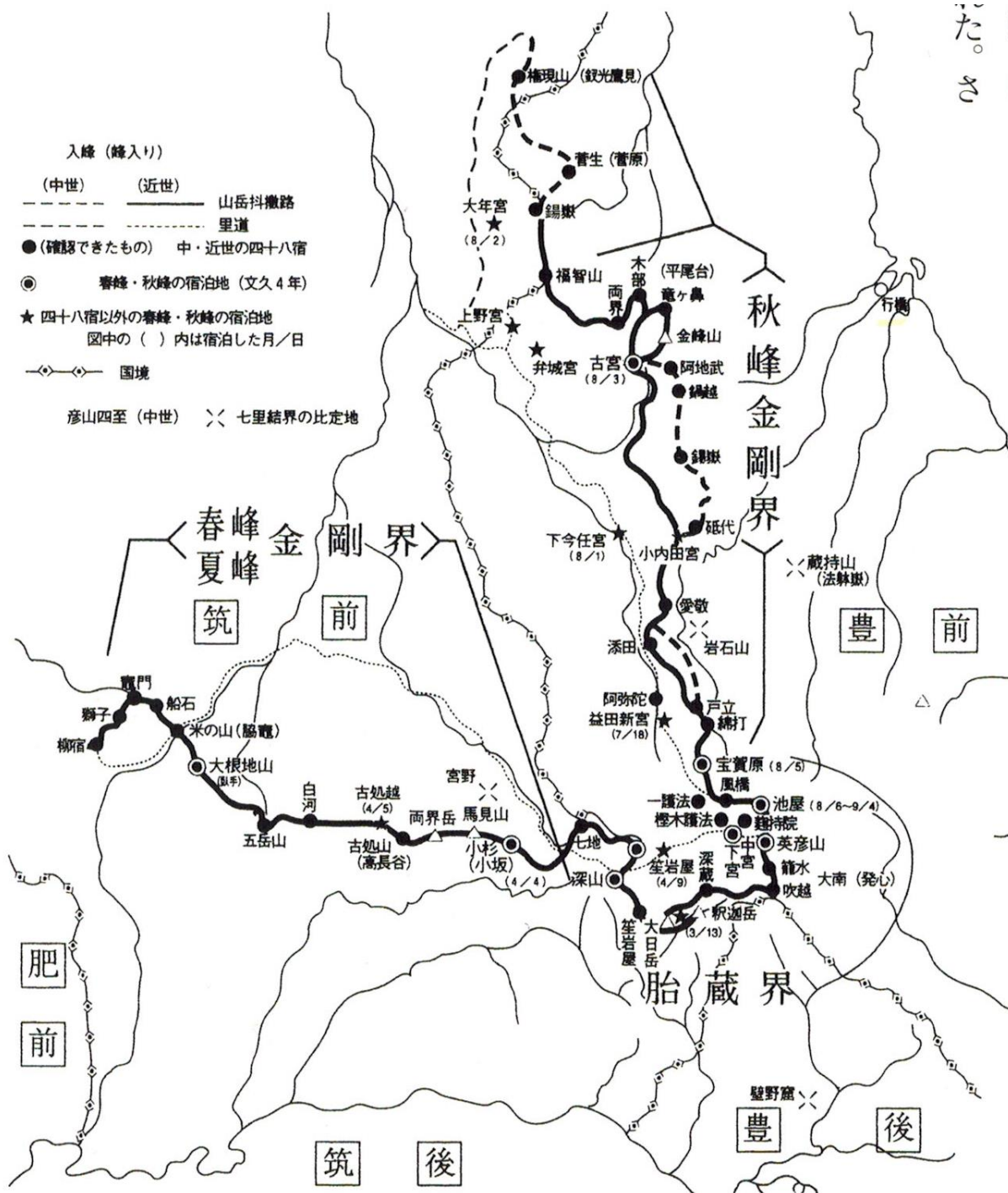
英彦山は胎蔵界、宝満山と福智山は金剛界とされている。

真言密教の概念で、胎蔵界は胎蔵界曼荼羅、金剛界は金剛界曼荼羅——インドサンスクリット語のバジラダートゥ・マンダラ(vajradhā tu-maṇḍala) のことで、宇宙の根源的な仏である大日如来を中心に、多くの仏を配置して真言密教の世界観を図で表現したものである。

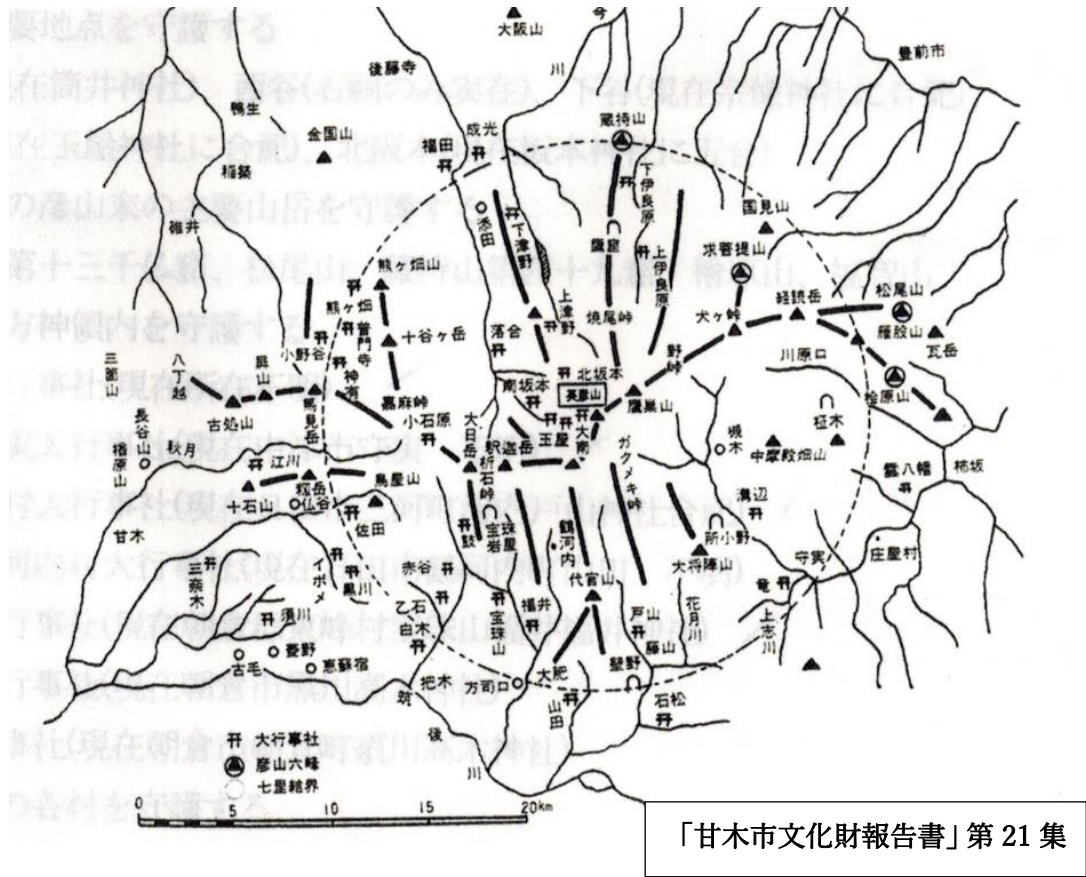
金剛界曼荼羅は大日如来の金剛(ダイヤモンド)のごとき硬く強い智をあらわし、胎蔵界曼荼羅は母のごとき慈悲の心をあらわす。



修験者——山伏たちの峰入り修行は、英彦山から宝満山(太宰府市・筑紫野市)への春峰・夏峰と英彦山から福智山(北九州市小倉南区)への秋峰と呼ばれる修行コースがあった。



英彦山三季の峰入りコース図 (山本 2006 から転載)



「甘木市文化財報告書」第 21 集

大行事社から高木神社へ

しかしながら、修験道は明治新政府による神仏分離政策および明治五年(1872)の太政官布告「修験宗廃止令」によって衰退・消滅してしまった。

そして、大行事社という名称についても、その多くが「高木神社」に改められ、明治・大正・昭和という時代の流れのなかで、荒れ果て、かなりの神社が所在不明となった。

とりわけ、英彦山内の山内大行事社については、位置不詳か別の神社に合祀されるなど、惨憺たる状況になっている。苛烈な廃仏毀釈運動に巻き込まれたのであろう。

いつの時代にあっても、文化の破壊活動だけは絶対に許すことはできない——と、肝に銘じるべきである。

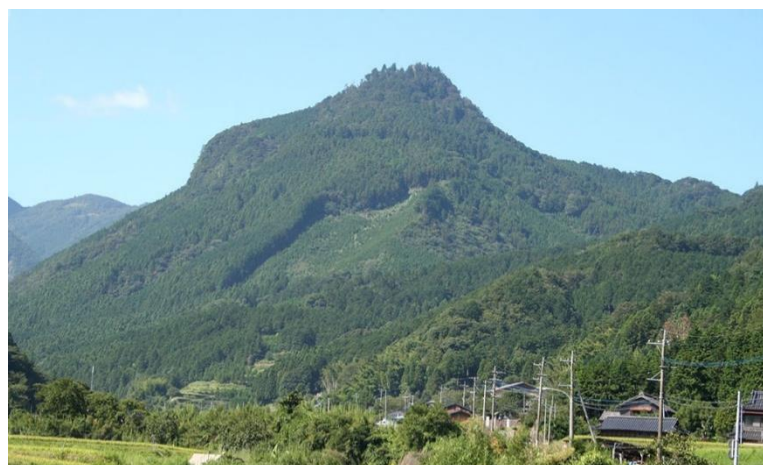
(1) 山内大行事社(英彦山内の大行事社)

国	郡名	神社名	所在地		備考
豊前	田川郡	点合護法社	南坂本	唐ヶ谷(筒井神社)	合祀。旧地不詳
		点合護法社	西谷	西谷(町南部)	位置不詳
		点合護法社	下谷	下谷(勝円坊周辺)	位置不詳
		点合護法社	玉屋谷	英彦山(玉屋神社)	合祀。旧地不詳
		点合護法社	北坂本	北坂本(北坂本神社)	合祀。旧地不詳
		計5社			



(2) 六峰内大行事社

国	郡名	六峰	神社名	所在地	備考
豊前	田川郡	福智山	大行事社	田川郡福智町	
	京都郡	等覚山	大行事社	京都郡苅田町	普智山第十三窟千仏窟
		蔵持山	大行事社	京都郡みやこ町犀川上高屋	蔵持山第四十九窟
	上毛郡	求菩提山	大行事社	豊前市求菩提	求菩提山第一窟
		松尾山	大行事社	築上郡上毛町西友枝	
	下毛郡	檜原山	大行事社	大分県中津市耶馬溪町中畑	
			計6社		



求菩提山

(3)山麓大行事社(七大大行事社)

国	郡名	神社名	所在地		備考
豊前	田川郡	大行事社	添田村	添田町添田	所在不明
	下毛郡	三所神社	守実村	中津市山国町守実龍	龍樹山権現・上志川
豊後	日田郡	戸山神社	鶴河内村	大分県日田市鶴河内	
		(大行事神社)	夜開郷林村	?	山田の大行事社とする説あり
筑前	上座郡	福井神社	小石原村	朝倉郡東峰村福井	
		高木神社	黒川村	朝倉市黒川宮園	座主助有法親王の黒川院
		高木神社	須川村	朝倉市須川	
		計 7 社			

(4)各村大行事社

国	郡名	神社名	所在地		備考
豊前	田川郡(5)	高木神社	田川郡添田町大字津野 6717 番の 1		
		高木神社	田川郡添田町落合 3583 番		
		高木神社	田川郡添田町津野 2227		
		高木神社	田川郡大任町大行事 118 番		
		高木神社	田川郡大任町大行事 2496-1		
	京都郡(2)	高木神社	京都郡みやこ町犀川上伊良原向田		ダム建設のため遷座
		高木神社	京都郡みやこ町犀川下伊良原荒良鬼山		ダム建設のため遷座
	築上郡(1)	高木神社	築上郡築上町船迫字水上 1133 番		
	下毛郡(4)	大行事社	大分県中津市山国町槻木		
		大行事社	大分県中津市山国町溝辺		
		三所神社	大分県中津市山国町上志川		
		雲大原八幡	大分県中津市耶馬溪町宮園		
	豊後	日田郡(1)	大行事社	大分県日田市石松町	
計	13 社				
筑前	嘉穂郡(5)	高木神社	嘉麻市桑野 2588 番		
		高木神社	嘉麻市小野谷 1580 番		
		高木神社	嘉麻市桑野 1399 番		
		高木神社	嘉麻市平 217 番		
		高木神社	嘉麻市上山田下宮		
	朝倉郡(8)	高木神社	朝倉郡東峰村小石原鼓 978-8		
		高木神社	朝倉市佐田 377 番		
		高木神社	朝倉市佐田 2953 番		
		高木神社	朝倉市江川 1201-1		ダム建設のため遷座
		高木神社	朝倉市三奈木(三奈木神社)		
		高木神社	朝倉市杷木白木 172 番		
		高木神社	朝倉市杷木赤谷 744 番		
		高木神社	朝倉市杷木松末 2784 番		
	鞍手郡(1)	高木神社	宮若市黒丸 1572 番		
	御笠郡(2)	高木神社	筑紫野市天山字山畑 241 番		
		高木神社	筑紫野市大石字上ノ屋敷 569 番		
	浮羽郡(1)	高木神社	久留米市田主丸町豊城		
計	17 社				
合計	30 社				

国	郡名	山内	六峰内	七大	各村	計
豊前	田川郡	5	1	2	5	13(27.1)
	京都郡		2		2	4(8.3)
	上毛郡		2			2(4.2)
	下毛郡		1		4	5(10.4)
	築上郡				1	1(2.1)
豊後	日田郡			2	1	3(6.2)
計		5	6	4	13	28(58.3)
筑前	嘉徳郡				5	5(10.4)
	朝倉郡			3	8	11(22.9)
	鞍手郡				1	1(2.1)
	御笠郡				2	2(4.2)
	浮羽郡				1	1(2.1)
計		0	0	3	17	20(41.7)
合計		5	6	7	30	48(100.0)

まとめ

どうしてこのような作業を行っているのか、不審におもわれる方もおられよう。

すでに述べたように、『彦山流記』は、邪馬台国の時代からみれば、はるか後代の書物で、しかも英彦山修験道の影響を色濃く受けた内容となっている。古代史の史料として用いるためには、一つ一つの記事内容を注意深く精査し、慎重に取り扱わねばならない。

これまでの作業の結果、少なくとも、平安時代においては、英彦山を中心に七里四方に 48 の大行社が設置され、いわば結界を張るように英彦山を守護していたことが明らかになった。

そして、戦国の群雄割拠の時代までは、英彦山はその領域内の住民から租税を徴収するなど、独立国家的な運営を行っていた。

ところが、明治の神仏分離運動によって、仏教的要素が追放されてしまった。

その結果、ほとんどの大行社が高木神社に改められた。

高木神社といえば、高皇産霊尊(タカミムスビ)＝高木神を祭る神社である。

仏教的要素が剥ぎ取られたあとに、高皇産霊尊(タカミムスビ)が姿を現わした。

しかも、英彦山を中心に七里四方(半径 28 キロ)の範囲から、48 もの神社が姿を現わしたのである。

もちろん、48 社は英彦山修験道全盛期の数であり、古代の実態とは言い難い。また、列挙した個別の神社についても、所在不明なもの、あるいはその所在に議論の余地のあるものなども交じっており、この情報をストレートに用いることについては慎重を期す必要がある。

それでも、以下のような傾向がみえてくる。

(一)豊前田川郡の英彦山が中心的位置を占めている。

やはり、英彦山が中心とされている。娘婿の天忍穂耳命も英彦山に祭られ、前述のとおり、その妃でタカミムスビの娘でもある万幡豊秋津師比売命も近傍の香春神社に祭られている。

しかも、英彦山に祭られている産霊(むすび)神社をタカミスビの故地とする伝承もある。

天照大神の天の岩戸の後、天忍穂耳命と万幡豊秋津師比売命、タカミスビらの伝承が英彦山を中心とした地域に集中的に残されている。

彼らは、「天の岩戸」の後、筑紫平野から豊前国——英彦山方面に本拠を移したのではないか。それらの伝承が高木神社の分布に反映しているのではないか。

(二)高木神社の分布は筑紫平野から豊前田川郡への移動の痕跡か。

しかも、上座郡(朝倉郡)とその東方の豊後日田郡を合わせた地域に、高木神社の一定の固まりがみられる。

とりわけ、朝倉郡と日田郡内に七次行事社が 7 社のうち 5 社も置かれたことはきわめて重要である。各村行事社についても、30 社のうち 9 社(30.0%)を占めている。

<朝倉郡と日田郡の七次行事社>

上座郡 (朝倉郡)	福井神社	小石原村	朝倉郡東峰村福井	南北朝時代、助有法親王が彦山初代座主となり黒川に居を定め黒川院と称したという。
	高木神社	黒川村	朝倉市黒川宮園	
	高木神社	須川村	朝倉市須川	
日田郡	戸山神社	鶴河内村	大分県日田市鶴河内	山田の大行事社とする説あり
	(大行事神社)	夜開郷林村	?	

<朝倉郡と日田郡の各村行事社>

朝倉郡 (8)	高木神社	朝倉郡東峰村小石原鼓 978-8	
	高木神社	朝倉市佐田 377 番	
	高木神社	朝倉市佐田 2953 番	
	高木神社	朝倉市江川 1201-1	ダム建設のため遷座
	高木神社	朝倉市三奈木(三奈木神社)	
	高木神社	朝倉市杷木白木 172 番	
	高木神社	朝倉市杷木赤谷 744 番	
	高木神社	朝倉市杷木松末 2784 番	
日田郡 (1)	大行事社	大分県日田市石松町	
計	9 社		

さらには、旧黒川村の高木神社に関する別格扱いが注目される。

南北朝時代、豊前城井郷の地頭職字都宮信勝が、後伏見天皇(1288～1336)第六皇子の助有法親王(安仁親王・1320～1361)に自分の娘を嫁がせたうえ、彦山座主に推挙し、彦山側もそれを受諾したという一件があった。

ところが、助有法親王は妻とともに英彦山ではなく、英彦山から直線距離で 15 キロ余も離れた朝倉郡の黒川村の黒川院に居を定めたのである。



高木神社

朝倉市黒川宮園（旧筑前国上座郡黒川村）

祭神 高皇産靈尊・伊弉諾尊・伊弉冉尊
相殿 五部神

（天兒屋根命・天太玉命・天細女命・石凝姥命・玉屋命）

この高木神社は江戸時代まで大行神社といわれ、彦山神領の鎮護を目的とした彦山麓七大行事社の一つである。創建の時期は不明であるが、寄進された最古の史料に天文二十三年（一五五四）銘の墨書が確認できる。

高千穂家（現在の英彦山宮司家）に残る記録によると、正慶二年（一三三三）後伏見天皇の第六皇子長助法親王、後の助有法親王が彦山座主として九州へ下向され、世襲制初代座主に就任したという。翌年には「黒川院」御所を造営し、第十四代舜有座主が豊臣秀吉の九州征伐で降伏するまで、約二百五十年間にわたり、九州における修験道の中心であった彦山と共に、一大宗教都市として繁栄している。

江戸時代に筑前国が黒田領となると、黒田家との関係が悪化し、黒川に残る歴代座主の墓所や栄華を誇った旧跡は、第二代藩主黒田忠之の破壊命令で消滅してしまう。現在、高木神社では毎年十月二十九日に、福岡県無形民俗文化財に指定された宮座行事がある。行事には中世修験道の要素が色濃く残り、当時の黒川院を物語る数少ない伝承となっている。

歴代座主

初代助有 二代浄有 三代有忠 四代有俊 五代有依
六代有敏 七代頼有 八代亮有 九代興有 十代有胤
十一代有信 十二代連有 十三代連忠 十四代舜有

平成二十一年十月二十九日 黒川協議会

このことについて、長野覚氏は『山岳宗教(修験道)集落英彦山の構造と経済的基盤』において、「この理由について従来から言われているのは、当時彦山が女人禁制であったからというのであるが、それにしても少々彦山領内では偏在した所に持っていき過ぎたように思われる。他に理由があるのではなかろうか」

とされ、彦山と黒川院の二元的組織という視点を提起されている。

しかしながら、彦山と黒川院の地には、もっと深い歴史的な背景があったのではないか。

そもそも、天忍穂耳命と万幡豊秋津師比売命、タカミムスビらは、筑紫平野の東方に位置する朝倉郡・日田郡から英彦山——豊前方面に移動したのではないか。高木神社の濃密な分布はそのことをしめしているのではないか。そのような歴史的な背景を踏まえ、助有法親王(安仁親王)は、いわば本家帰りをしたのではないか——ということが推察される。



黒川院址

(三)「峰入り」は古代人の山の道か。

前掲の【宝満山——英彦山——福智山】という峰入りのコースは、尾根伝いの山の道でもある。神功皇后が討伐したとされる羽白熊鷲は、古処山など朝倉山地を拠点とした山岳系の人物であったろう。

修験者の峰入りのコースは、古代における山岳系の人々の伝統的な山の道を反映したものではないか——そういう思いも湧いてくる。



宗像三女神

次に、宗像三女神のことである。

天照大神の次世代の女性たちである。

宗像三女神は天照大神とスサノオの「誓約(ウケヒ)」によって生まれている。

古代日本で行われた「占い」のことで、「宇氣比」、「祈」、「誓」などとも書かれる。

『古事記』には、天の安河をはさんで天照大神がスサノオの十拳の剣を三段に打ち折り、「天真名井」に振りそそぎ、嘔んで吐いた息吹から宗像三女神が生じたとする。

『日本書紀』は、「これすなわち胸形の君等がいつき祭る神なり」、つまり、「宗像の君らの氏神である」と書かれている。



『図説古事記日本書紀』(西東社)より

天照大神の勾玉から生まれたのが天忍穗耳命など5人の男子、スサノオの十拳の剣から生まれたのが宗像三女神とされる。

天照大神率いる筑紫(高天原)の勢力側につくのか、スサノオ率いる出雲の勢力側につくのか、神占いによって決めようとしたのかもしれない。

その結果、宗像三女神は出雲のスサノオの側についた。

一方で、『日本書紀』神代紀上・第六段第三の一書には、
 「すなわち、日神(天照大神)の生(あ)れませる三柱(みはしら)の女神(ひめがみ)を以ては、葦原
 中国の宇佐嶋に降りまさむ。今、海の北の道の中に在す。号(なづ)けて道主貴(ちぬしのむち)と
 曰(まう)す。これ、筑紫の水沼君らが祭る神、これなり」

と書かれている。

要約すれば、次のとおりとなろう。

(一) 母は日神＝天照大神

(二) 葦原中国の宇佐嶋＝豊前国の宇佐(大分県宇佐市)

(三) 海の北の道の中(海北道中)＝【宗像→大島→沖ノ島→対馬→朝鮮】の朝鮮航路

(四) 筑紫の水沼君らが祭る神＝筑後川下流域の三潞地方を拠点とする水沼一族の氏神

宗像三女神は、筑後の三潞(筑後川・有明海)→宇佐(周防灘)→宗像(響灘・日本海)という順序で
 移動しているようにおもわれる。

水沼君

三潞郡というのは、筑後国のうち、久留米市の一部(おおむね大石町、白山町、梅満町、松ヶ枝
 町、西町、六ツ門町、津福今町、荒木町白口、荒木町荒木以西)・筑後市の一部(西牟田)・大木
 町・大川市全域・柳川市の一部(高島、立石、矢加部、東蒲池、西蒲池、西浜武、古賀、南浜武、
 昭南町・間など)などの筑後川下流域のことである。三潞郡は水沼に由来する。

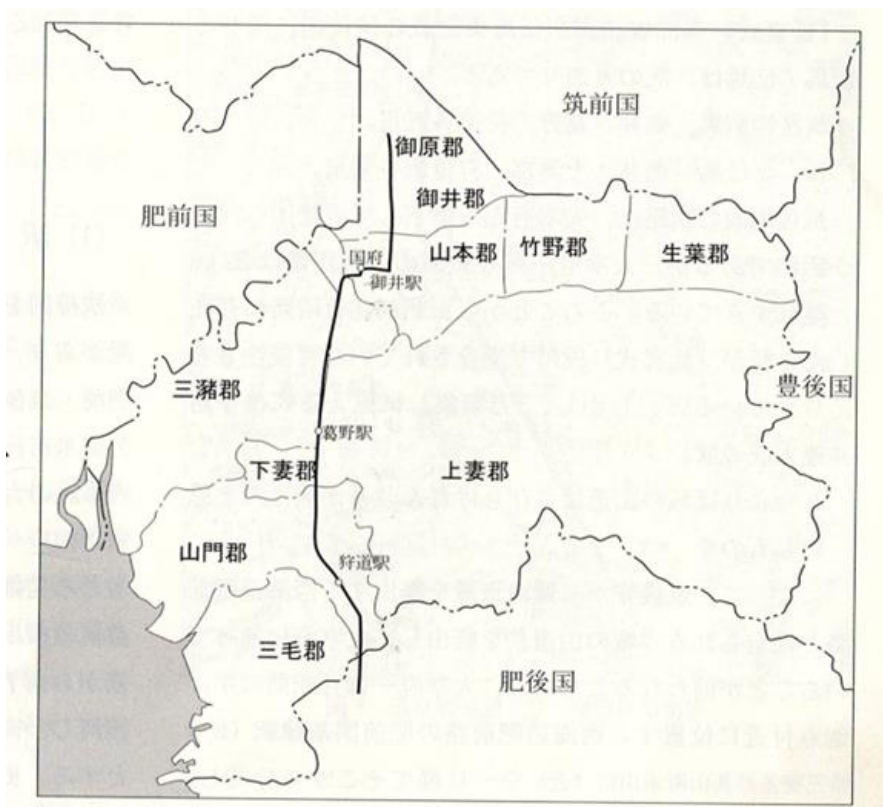
九州第一の筑後川下流域で、有明海に面している。湿地帯が広がっていたため、水沼(みぬま)と
 呼ばれ、そこを拠点とする豪族は水沼氏とよばれたのであろう。もちろん、海人族であったにちがひ
 ない。

その領域については、筑後川の蛇行の関係もあって古代とは大きく地勢が変化しているが、昭
 和 28 年水害の浸水状況が参考になろう。

●昭和28年水害の破堤箇所と浸水区域



筑後川・有明海がうきは市に迫り、佐賀平野を大きく飲み込み、吉野ヶ里にも迫っている。
 古代において、吉野ヶ里が臨海部の集落であったことがよくわかる。
 北に延びているのが宝満山(筑紫野市・太宰府市)を源とする宝満川である。
 そして、久留米から下流の筑後川左岸一帯が三潯郡である。

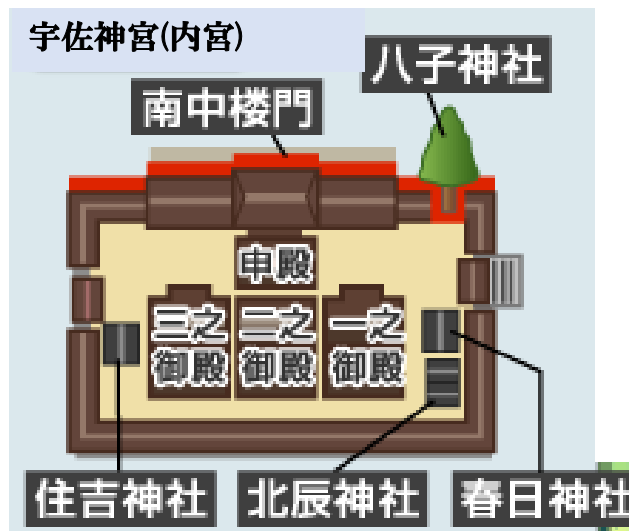


その水沼氏が宗像三女神を氏神とする、と『日本書紀』は伝えているのである。
 残念ながら、水沼氏の系図が残されていないので、水沼氏と宗像三女神との関係は不明であるが、いずれにせよ、『日本書紀』の記事は宗像三女神とその母とされる天照大神(=卑弥呼)のルートが、筑紫平野にあったことを強く示唆している。
 つまり、邪馬台国筑紫平野説を補強する貴重な情報ということになる。

豊前国宇佐

そして、『日本書紀』に「日神(天照大神)の生(あ)れませる三柱(みはしら)の女神(ひめがみ)を以ては、葦原中国の宇佐嶋に降りまされむ」とあるとおり、宗像三女神は宇佐(大分県宇佐市)に転任させられた。

宇佐には式内社で豊前一の宮である宇佐神宮があり、祭神は、
 (一之御殿) 八幡大神・誉田別尊(応神天皇)
 (二之御殿) 比売大神・宗像三女神(多岐津姫命・市杵島姫命・多紀理命)
 (三之御殿) 神功皇后・息長足姫命
 とされている。



比売大神を卑弥呼と解する説があるが、地元においても、神社においても、比売大神は宗像三女神とするのが伝統的な定説である。

したがって、比売大神を卑弥呼とする邪馬台国宇佐説には根本的な問題があるといえようが、天照大神＝卑弥呼によって宗像三女神が宇佐に赴任したということは、この地域が邪馬台国(高天原)勢力の重要な一角を占めていたことを示しているともいえる。

宇佐は豊前国の最南端に位置しており、しかも豊前海に面している。

宗像三女神は海人族を束ねて豊前海の安全を司る力量を期待されたのであろう。



宇佐から宗像へ

そして、『日本書紀』に、

「今、海の北の道の中に在す。号(なづ)けて道主貴(ちぬしのむち)と曰(まう)す」

とあるとおり、宗像三女神は宇佐から宗像への転任を命じられた。

『日本書紀』の一書には、

「汝三神(いましみはしらのかみ)、道の中に降りて居(ま)して天孫(あめみま)を助け奉(まつ)りて、天孫の為に祭られよ」

とある。

「海の北の道の中(海北道中)」とは、【宗像—大島—沖ノ島—対馬—朝鮮】の朝鮮航路を意味する。

ただし、沖ノ島の祭祀が行われるようになったのは、4世末ごろの神功皇后の朝鮮出兵以降とみられるから、3世紀半ばごろの宗像三女神の時代、すなわち後期邪馬台国の時代には、いまだ響灘・日本海方面が主たる管理区域であったにちがいない。詳しくは拙著の『神功皇后の謎を解く』(原書房)を参照されたい。

宇佐から宗像へ至るルート

宗像三女神は、行橋の草野の津から上陸しているようである。前述したように、宗像三女神と大国主命の伝承が英彦山に残されている。そうであれば、草野の津から今川沿いに英彦山に至るいわゆる「御潮井採り」のコースが最も自然なコースである。

前述したように、天照大神の天の岩戸の後、タカミスビ・万幡豊秋津師比売命・天忍穗耳命らの伝承が英彦山を中心とした地域に集中的に残されている。彼らは、「天の岩戸」の後、筑紫平野から豊前国——英彦山方面に本拠を移した可能性が高い。

その動きのなかで、筑後川・有明海方面から宇佐に転任して豊前海を守っていた宗像三女神は、さらに宗像方面へと転任となり、その際に、タカミスビ・万幡豊秋津師比売命・天忍穗耳命が拠点とする英彦山・赤村・香春など田川郡を経由していったのであろう。

そして、田川郡からは嘉穂郡(飯塚市)を経由し、さらに直方・鞍手郡を経由して宗像に到着している。

嘉穂郡(飯塚市)の伝承地

地区	市	場所	伝承の内容
筑前 嘉穂郡	飯塚市 (旧穎田村)	鹿毛馬	神武天皇が馬見山の麓に社を建て、宗像三女神と天照大神を祭った(巖島神社の由来)
		目尾 目尾山	目尾山は昔、比売神(宗像三女神)が宇佐から宗像に向かうときに滞在された聖蹟の地という。(河野桐谷『高千穂問題と神武天皇聖蹟』南画鑑賞会・昭和 15)
		佐與	宗像三女神伝承

○**巖島神社(飯塚市鹿毛馬)**

【祭神】市杵島姫・田心姫命・湍津姫命

【由緒】

当社は日思山の山上に建立され、聖武天皇の御時(七二四年～七四九年)御社の東に宮司の坊(浄福寺)を建立。

以後延文年中(一三五六年～一三六一年)まで筑前、豊前両国の衆民により祭られていた。しかし山上であるため参詣に不便なことから延文年中、本社三女神を筑前国鹿毛馬村へ遷し奉り天照皇大神を豊前国神崎村に遷し、共に両村の産土神として祀られる。その後山上の社殿は野火のため焼亡したが、その礎石は今も現存している。永正元年(一五〇四年)神殿並びに社屋を再建。(大願主清原兼通敬白の棟札有り)村人百六十六名と共に祭事を執り行っている。(文亀三年の宮座帳より)明治三十二年(一八九九年)縣社に昇格。

嘉穂郡誌には「郡内唯一の縣社にして社地は広大ならざるも、高燥にして清浄なり」と記されている。

昭和七年(一九三二年)神殿、幣殿、拜殿を再建し、現在に至る。

○**巖島神社(飯塚市鹿毛馬・旧嘉穂郡穎田村大字鹿毛馬字宮) (『福岡県神社誌』)**

創立年月日不詳記。豊前國宇佐島より筑前國宗像郡沖津島に鎮座の時、當村日尾山を越給ふ古實を以て、景行天皇御宇三女神を祭り、今に社殿神石柱石等残れり。後、光嚴天皇延文年中(附記、後光嚴天皇は所謂北朝の天皇なり又延文年中は所謂北朝の年代にて吉野朝の正平十一年より十五年に至る間なり)今の社地字宮に遷座産神と崇奉る。

鞍手郡・直方市の伝承地

飯塚市の鹿毛馬から鞍手郡鞍手町の六ヶ岳(標高338.9m旭岳・天冠・羽衣・高祖・崎戸・出穂の六峰)の崎戸峰に天降りして、そののち宗像に至ったという。

○**六嶽神社(鞍手郡鞍手町室木)**

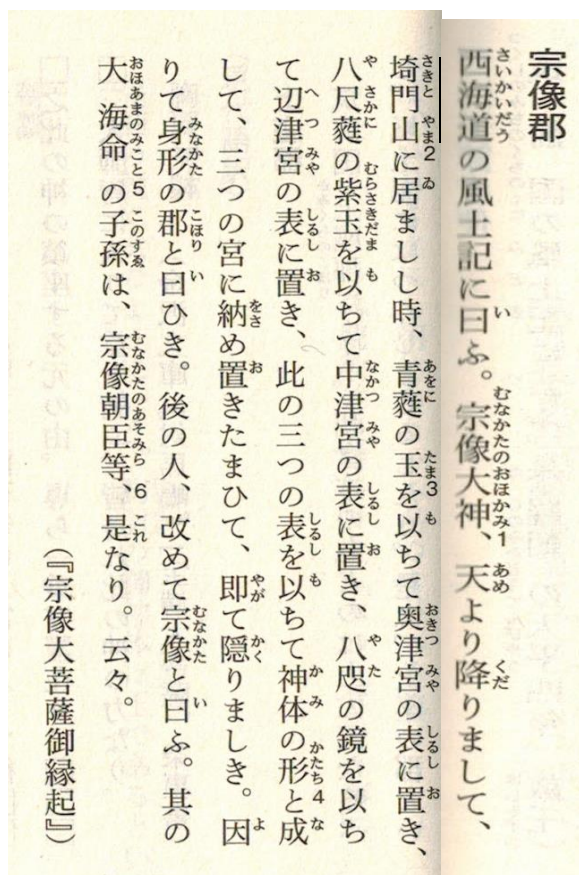
【祭神】田心姫之神・湍津姫之神・市杵島姫之神

【由緒】

「紀元前七百年ノコロ皇女三神靈山六嶽崎門峰ニ御降臨アリ、此地ヲ上宮ト定メ室木ノ里ニ下宮ヲ建立シ、安産交通安全ノ守護神トシテ鎮守ノ社トス」



【宗像大菩薩御縁起】



なお、直方市・鞍手郡内の宗像三女神の伝承地は次のとおり【『福岡県神社誌』(昭和 15 年)】。

神社名	所在地	祭神	境内社・摂社
天照神社	宮若市磯光 266(鞍手郡宮田町大字磯光字儀長)	ニギハヤヒ	湍津姫之神
六嶽神社	鞍手郡鞍手町大字室木 1207 (鞍手郡西川村大字室木字下方)	宗像三女神	
若宮八幡宮	宮若市水原 395(鞍手郡若宮村大字水原字仮屋)		巖島神社 (宗像三女神)
劍神社	鞍手郡鞍手町木月 1349 (鞍手郡古月村大字木月字片原)		神巖島比売神社 (巖島比売)
劍神社	鞍手郡鞍手町新延(鞍手郡西川村大字新延字火尾)	宗像三女神	
須賀神社	北九州市八幡西区木屋瀬 3-19-1 (鞍手郡木屋瀬町大字木屋瀬字本町東)		巖島神社(市杵島姫)
巖島神社	宮若市上大隈 438 (鞍手郡宮田町大字上大隈字二反田)	市杵島姫尊	
日吉神社	宮若市下(鞍手郡吉川村大字下字高宮)	五男三女大神	日原神社(市杵島姫)
日原神社	宮若市脇田(鞍手郡吉川村大字犬鳴字下り松)	市杵島姫命	
王子神社	直方市感田字八つ辻	宗像三女神	

宗像三女神の伝承地

以上述べたように、天照大神の天の岩戸の後——タカミムスビ・万幡豊秋津師比売命・天忍穗耳命の伝承が英彦山を中心とした豊前地域に集中的に残されているが、宗像三女神についても、【筑紫平野→宇佐→豊前(京都郡・田川郡)→嘉徳郡→鞍手郡→宗像郡】と、彦山川・遠賀川を下って響灘沿岸部に移動している。



そして、宗像三女神のうち、田心姫命と湍津姫命は出雲の大国主命の妃となり、市杵島姫はニギハヤヒの妃になっている。

ニギハヤヒは、次回で述べるように鞍手郡・遠賀郡など遠賀川下流域を拠点にしていた。

宗像三女神が拠点とする宗像とは隣接した地域である。

大国主命といえば、スサノオの後継者である。

高天原の天照大神の後継者たる宗像三女神・ニギハヤヒと、出雲のスサノオの後継者たる大国主命が、遠賀川下流域の宗像・鞍手・遠賀地方において、いわば「三者同盟」を結んでいるようにみえる。

(以下、つづく)